

「ある日の夕ごはんの思い出」

ししおり小学校 二年 小野寺花純

わたしは今まで、たべものにあまり、きょうみがありませんでした。でも、ある日のできごときをきっかけに、たべものにたいする、気もちがかわりました。

一年生のころの、ある日の夕ごはんのとき、お母さんが作ったおかずは、

「なんか、おかずがつまらない。ごはんがすすまない。」

と、言ったわたしにお父さんが、ものすごくおこりました。

「ごはんを作ったお母さんにあやまれ。米

も、にくも、やさいも、どれだけの人が、か

かわってると思ってるのや。わかんねーなら

たべなくていい。」

そのあとわたしは、なきながら夕ごはんを、

たべました。

このできごときをきっかけに、わたしは、た

べものができるまでを考えてみました。お米

は、春に田うえをして夏にぐんぐんそだち、  
たい風などのききをのりこえて、秋にいねか  
りをし、ながい時間をかけてできあがること  
を、お母さんから教えてもらいました。おな  
じように、おにくややさいも、大じにそだて  
ることがたいへんだというときしりました。  
そのとき、じぶんがごはんがつまらないと言  
たことに、ごめんなさいという気もちがうか  
んできました。わたしがいまい日たべている、  
お米やにく、魚ややさい、くだものなどをた  
いせつにそだてている、のうかさんや、りよ  
うしさんに、かんしゃの気もちをもち、その  
たべものをまい日おいしくりょうりしてくれ  
る、お母さんや、きゅうしよくを作ってくれ  
る人たちにも、ありがとうの気もちをわすれ  
ずにごはんをたべることが、たいせつだと思  
いました。

お父さんにおこられたことは、すごくこわ  
かったけれど、この思いでをわすれずに、こ  
れからも楽しくごはんをたべたいと思います。